

踏み跡 <My Mountains>

天子山塊	本栖湖から龍ヶ岳へ	No.117
------	-----------	--------

富士山の周辺には、1000m～2000mの低山が沢山ある。中でも一番有名なのが三ツ峠を中心とした御坂山塊であろう。御坂山塊は富士の北側にあり、東端を山中湖北部で道志山塊・丹沢山塊と接し、西端を本栖湖北岸に置いている。そして、この本栖湖の南岸から富士川に沿って富士宮市に至る長い山稜が天子山塊と呼ばれる山域である。

天子山塊は、御坂と丹沢の有名に隠れて全く名の出ない山塊だが、静岡県生まれの私にとって無縁のままにしておくわけにはいかない山である。

小学生の頃に読んだ富士山麓に古くより伝えられる数多くの伝説の中には、この天子山塊にまつわるものは少なくない。また地図上からも難なく想像できることだが、天子山塊は富士を眺めるのには又とない敵地であることも付け加えておかなければなるまい。

今回初めて踏み入る天子山塊の山は、本栖湖南岸すなわちこの山塊の北端に座す龍ヶ岳。ガイドブックに載っていないので、どんな山かはさっぱりわからない。地図上での想像と、十年以上前になる小学校の遠足の時に本栖湖湖畔から見た小雨に煙る龍ヶ岳の記憶だけが手掛かり。



昭和43年11月5日

高尾発6時10分の電車。大月で乗り換えて富士吉田へ、そして5分の待ち合わせで富士行のバスに乗車。新雪の富士や足和田山付近の紅葉などを車窓から楽しみ、8時55分本栖湖に到着。乗り換えが無駄なくスムーズだったため、家を出てから本栖湖まで3時間40分で来てしまった。

湖はまだ朝寝から覚めきらず、一面の霧に包まれてひっそりとしている。

湖畔を水際に沿って南へ。溶岩の火山弾のような岩屑からなる岸边、秋の深まり行く姿を左右の草むらに感じながら約一時間で湖の最南端の小さな入江に到着。

北岸の烏帽子岳は雲の中に隠れている。湖水には無数の水鳥。戯れに投じた小石の波紋に一齐に飛び上がったが、またもとの静けさに戻った水面に下りて何やら餌あさを再開した。そんな穏やかな光景を前に、打ち寄せる小波を足元にして昼食。背後に構える大きな山が雨ヶ岳。

涸れた小沢に入りしばらくで、予想したとおりの道は消滅。本来の(昔ながらの)ルートは、小尾根に取りつ

踏 み 跡 <My Mountains>

いて真南に登って行くはずなのだが……。仕方なく沢から入り、しばらくの間うるさい藪との格闘を続けた後、一時間足らずで目的の小尾根に這い上がることができ、幽かな切り開きを頼りにかき分けること10分ほどで主稜線に飛び出すことができた。

古い資料を見ると羽下峠（*注）と名付けられているが、今では名もなく立札もない。ただ一本の頼りな気な小道が、白い毛をふっくらとさせた芒の中を根原に向かって走っているだけ。目指す龍ヶ岳への道もないし、南西に大きく立ち上がる雨ヶ岳への道もない。期待に反して富士は見え、雲の中で微動だにしない。見えるのは山麓の小さな突起群、大室山、片蓋山……。

きれいな円錐型の龍ヶ岳を目指して出発。やがて身の丈を没するほどの笹と芒に包囲され、ただ磁石の指針だけを頼りに頂上へ頂上へ。

龍ヶ岳頂上、跳躍でもせぬ限り周りの景色は見えない。時々ジャンプをして湖面を確かめながら元の道を羽下峠へ。一時間半を要しての頂上往復を済ませた後、峠で昼食。メニューはおにぎりとりんご。秋の涼風に汗ばんだ体がヒンヤリと心地よい。

峠から静岡県側に下り、根原へ。次のバスまで間がありすぎるのでブラブラ歩き始めたら、県境あたりで黒のトヨペットが拾ってくれた。赤の他人の車の中でうつらうつらしてしまい、気がついた時はもう河口湖駅に運ばれていた。やはり藪こぎは疲れる。

龍ヶ岳は過去にも色々な人が登り、その素晴らしさを記している。深田久弥氏もやはり藪をかき分けて頂に立ったと書いてあったように思う。

私だけではなく、ハードな藪こぎをしてまで登りたくなる「何か」がこの山にはあるのだろう。これで富士さえ見えればまったく非の打ちどころがない名山と言ってしまってもいいかもしれない。

何はともあれ、長年の思いが叶って龍ヶ岳の頂上を踏むことができ、言うことなし！！

以上

◆注：羽下峠 平成年代に入ってからガイドブックなどには「端足峠（はしたとうげ）」と表記されている。